



^ 13
2926
2



13  
2926  
2

昭和九年  
七月六日  
購末

春色傳家能花二編

因家田洞水遠渾一樹高をのり

村よはらぬ一き葉をた極うて雲平田

あふと西ふき花あつとむむと

下衝と水等一野のむも屋がて

花とちうと花書梅唐むと新塚乃

あふと西ふき花あつとむむと  
下衝と水等一野のむも屋がて  
花とちうと花書梅唐むと新塚乃

新編の文を以て其の處に編入  
田舎の傳家一著者も是れ花より  
題名は大傳が如く一採らば自然と  
他家の文を以て採りて集むるに  
世に傳へたる傳へたるは必し自然と  
云はく一今世に採りて其の處に編入

序文一編に於て其の處に編入  
是れ一編に於て其の處に編入  
丁樂ゆる物語花より採りて其の處に編入  
能く其の處に編入  
と云はく一今世に採りて其の處に編入  
百入上も其の處に編入



羅裙送餘香

二編 三編 四編 五編 六編 七編 八編 九編 十編  
 満ちの海にわたるはるばるはるばるはるばる  
 実を結ぶをよめせうん 知よしん

神田店 為米春水誌

金龍山人狂吟のむら 金蓮化巻

人目も今も 美のあまの  
 下はもとて 香をあらう  
 まはりのき けしきあ  
 さい  
 あまのこも んのつ  
 きふちくけり  
 一かりのさ  
 吹雪庵 葺き合



歌川貞重画





江戸の月夜  
百五十九  
月夜



春色田家の花巻之四

江戸藏書

為永春水著

第七回

あふ新田の路多りける大家小止宿するは若殿ハか春の  
 身の上を案ずり頼みのつけるがき聖之助極側小くち出  
 庭の景多と泳む居る折るは遠山の向方より出  
 美人のたそがれもは方を見せきり寄  
 かそのまんあつらうらぬ人



















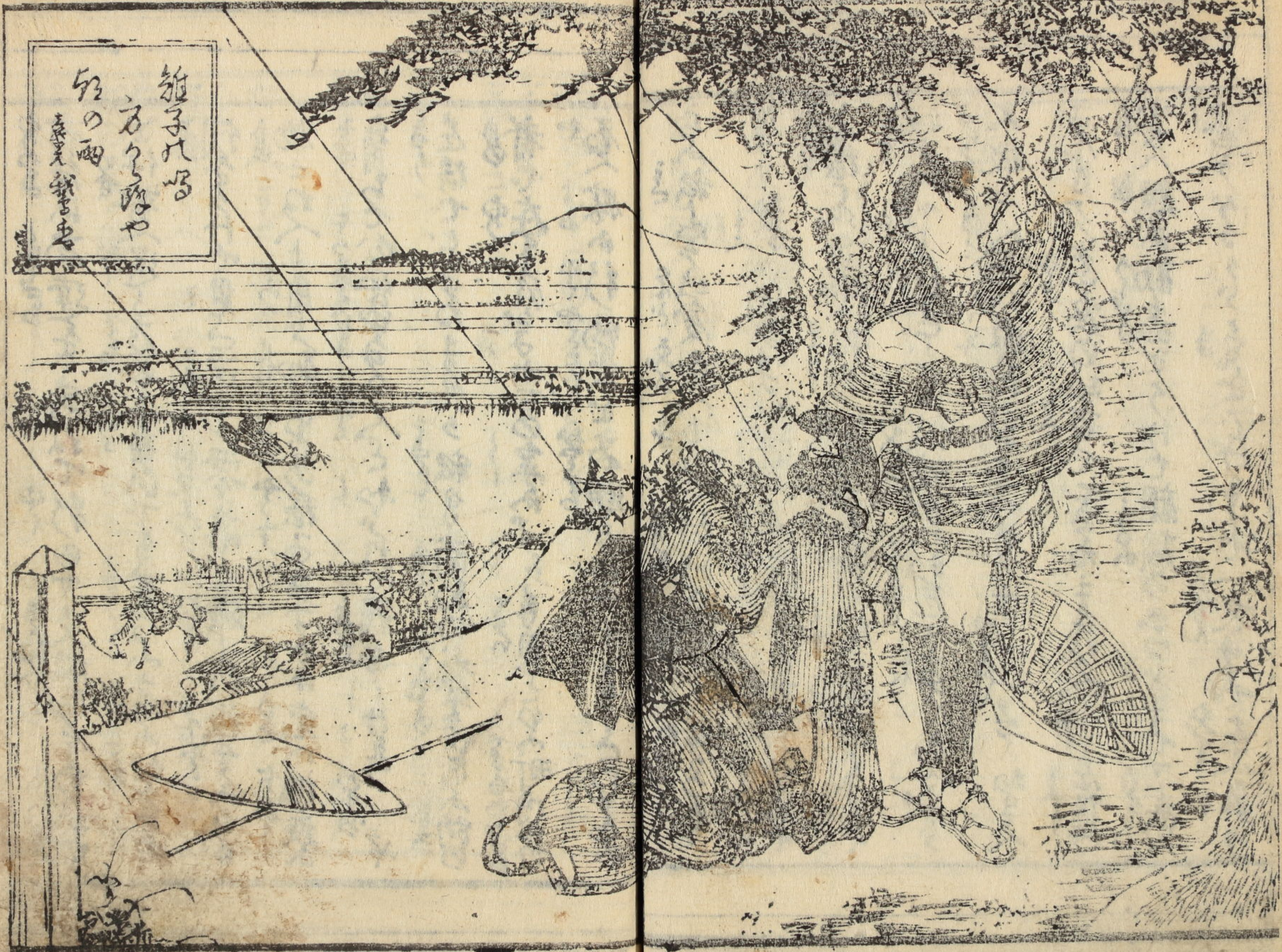












籠子れ  
方々  
の雨  
真実 観音 忠











夫もさるるはなれどもまはるる身の花びらさやびらめせし  
 実の娘の遊ののびる女の子の身とていふは  
 極を結びてこそはなれどもまはるる身の花びらさやびらめせし  
 初め自ら男の毒思はるる女もさるる身の花びらさやびらめせし  
 今もさるるはなれどもまはるる身の花びらさやびらめせし

春色田家の花巻之四  
 眠るふつとふけりて  
 春色田家の花巻之四

春色田家の花巻之五

江戸 烏永春水著

第九回

伊勢の物持は昔男武藏國をまゐりて  
 女せよふけりて父は他人ふ配合と言はるる  
 公つけりける父はるる人母も人藤原氏より  
 入間の船もよりの里さるける







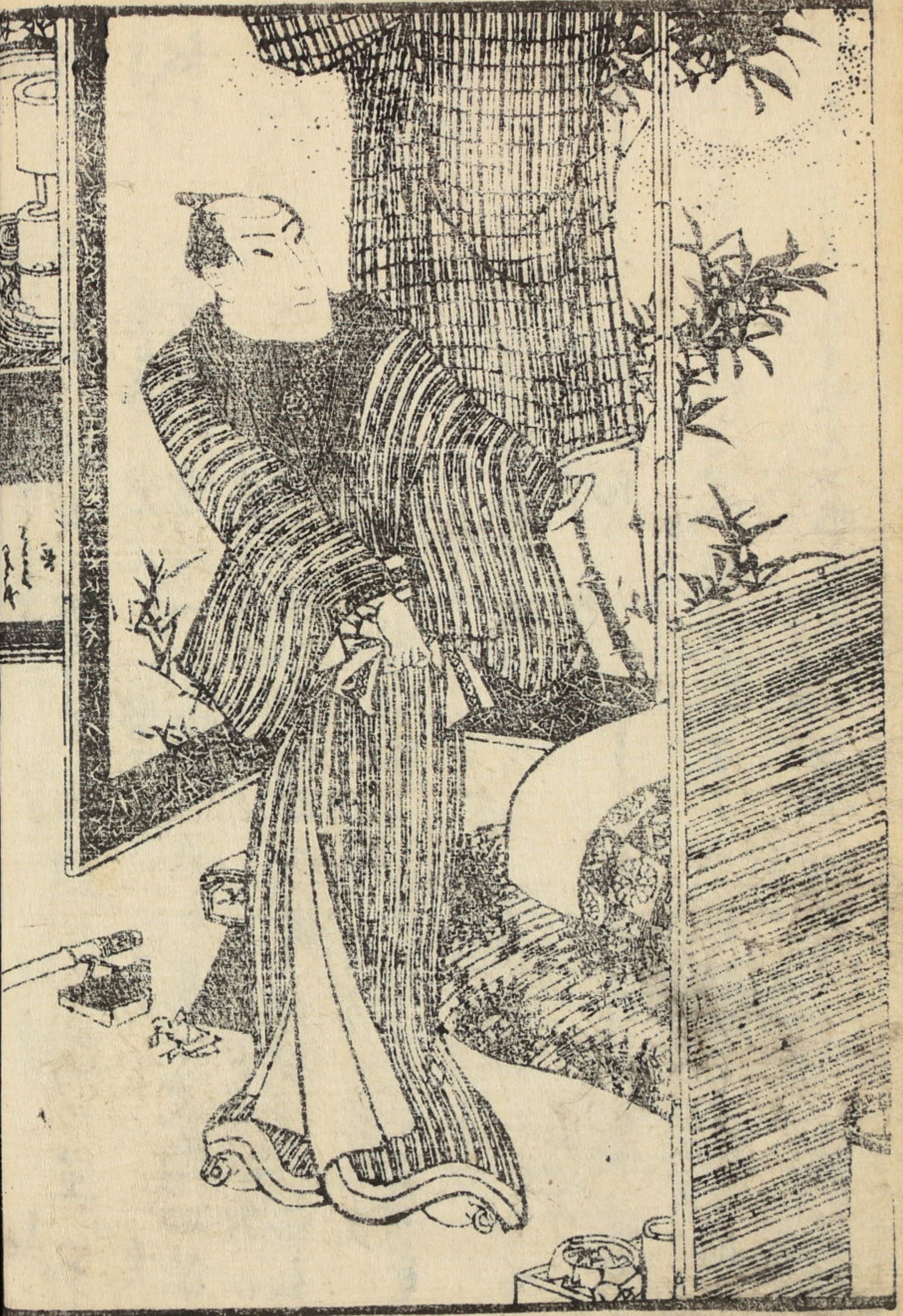
八重ののりの中をどめせお者めらびと実あつあつ  
かひねらびらりー 京「そり意味のこころのぼろく下ろ人  
なまふらびら実あつー人かやうく一ととまらあつ  
ア引怖ろく然を伴ハ家さん久 京「マヤお先さん久  
まへぼろく一ひね私まやアまろく一お後ろふ膝と膝一  
まへららうら下思のまへひらびらまへまをまらう  
くらふと存おて自身をこらして縮身をうまへ 京「マヤお  
お茶ごころ気がたけ盗人が遠入らうと思ひて解程  
怖ろく暗闇を燈火も横はふお所にお出を成の豆 京「  
私ハアお茶所へ方燈のお油をまふあつらまらヨお茶  
さんハお燈火もお持を成るあでけらまをせお方へお茶  
成まらのでまらまら入一まらまらまらまらまら  
言終らら返言まら出まらあつ 京「マヤお茶の用ハア  
マヤお茶のあつまらあつ 京「マヤお茶の用ハア  
お在らまらまらあつ 京「マヤお茶の用ハア  
けらまらまらまらまら 京「マヤお茶の用ハア

京「マヤお茶の用ハア  
京「マヤお茶の用ハア  
京「マヤお茶の用ハア  
京「マヤお茶の用ハア



雛鶴也  
如色下鳥也  
喜代也  
真菜庵

コントハホマニ  
ヤカユキマニ





味しこそ愛瀬ふくそん今宵よりあふる川を流る切  
と流る人寒き葉が秀遠よりあふか先と来三希の長  
月日相後の思ひも遂び暮ひが今宵結ぶの神さ  
互ふとるが一家止宿合身し身の逢見寐物た  
うちとけて来しとままる後朝の勝手の人目関た  
牌のうきふのうざればえの産愛別とあか顔  
ゆりけふとやゆ女の起りて兩戸とく明る毎の掃  
せまる極みの来来三希人起て勝手も立出む人か換

扱せ程よく一食のも後侍女あひ  
あやう且取のかねを成と本の中の個  
真のちきりのるふ引籠で居る三月がわるさ  
はらんむさうとあきふ山橋をわびてあま  
且那の留守ふ高むのをまると山と門の外  
物で柱の成  
山橋を  
とやまのうらふと二人で泰り





存公人ふまを悟りてそて入大なるありておぼふ目くらせ  
あそあそ入る隠居の義書と契のなをへ持約り  
撰出しと中などを分て居る中にお光も起出で食の  
も候は女と下女とらに扱ひぬわり下男も亦入る  
酒を買そりひひいひ友男の金入て酒盛してあ  
あしけるが奈三帯入一なるて書物をくらう一居る  
所へ主人も居るお光のまご今もまより入かあので  
十分の化粧一とらくをりのを教めて奈三帯の書

物をえらと栗むとて居る側小を寄完本と笑ひ  
もつち本ハお止るまかな 京一イテ別一七か大  
内化粧が出はまするはまは方の人か  
まのヨ 一徳方と作のハ何所でもかまは  
くしん世るをけしも見しるのハませんヨ 京一お光入  
内境のまよりひでも先の人透不見る毎度お光  
居る候と并 一イテ何候りてまて私がお光  
慕ふ極のまより入るものハ世の申小まはるませんハ

お茶まんが小万まんをツツ下がるお茶女を信切ふを成  
あの方いごころのまかせんヨ京のお茶小万とら降臨を本の中ふ  
あるお茶者なるお茶アアおとがけをひお茶まんが今ふ  
うけでの可きづり成小万一人のりてごころまはれヨト  
言ふことおふ元可きらしくお茶娘らしく言ふのも  
自然とまを電殿のりていご美露のお先が怒るを  
殊ふのりし京三帝の体き列座の小万ともある矣  
明ふ男氣の体電を傍らける

第十四

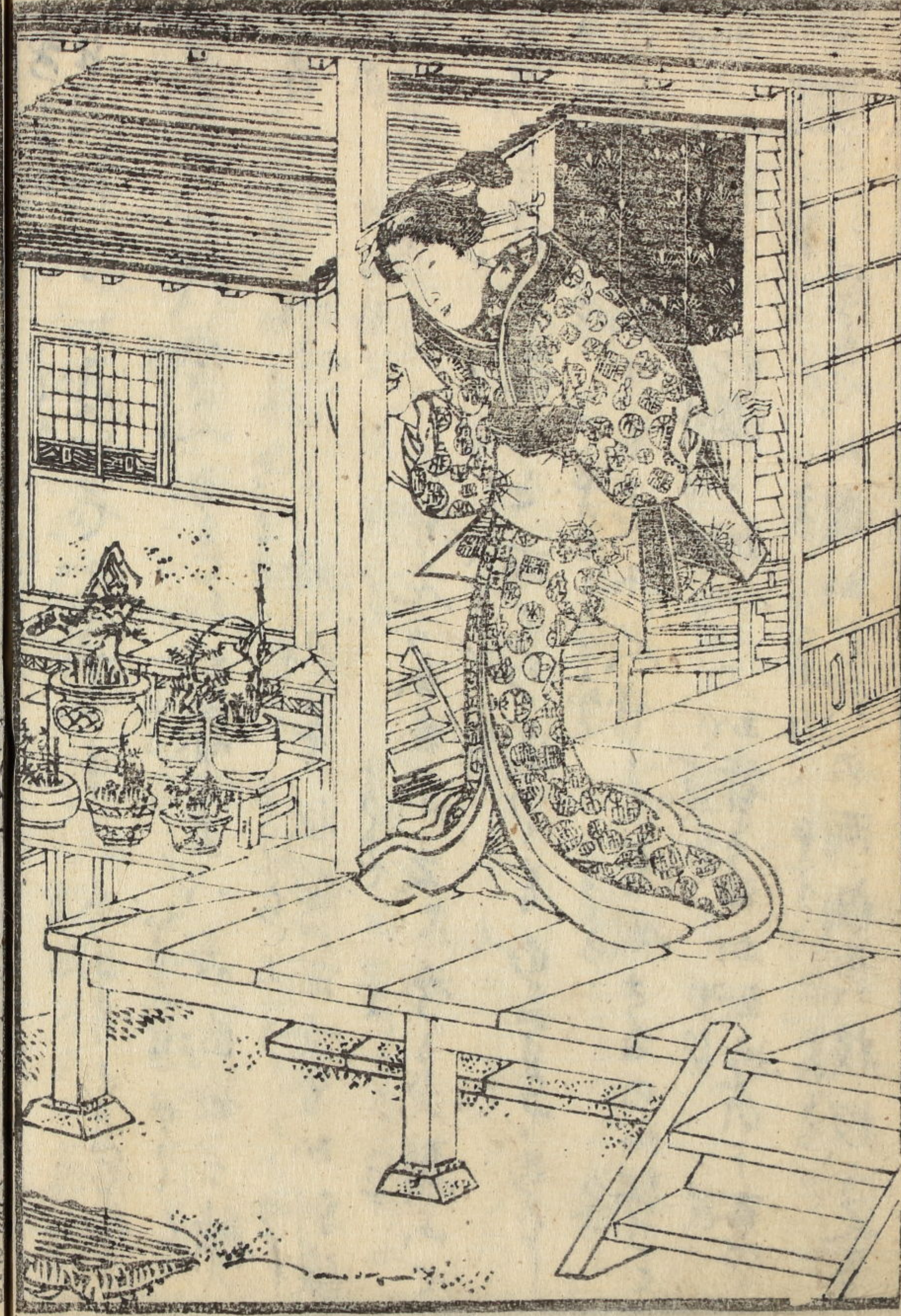
翻話再読京三帝が妹お國のお春の身の上お小  
うまが書まはれと津を平の村ある清助の家おあつ  
種く相殺せしものもあ捨ままらぬれ  
おまへつてお茶が替へる茶づらと思ひもあへん  
けとぶをぞか國とおふ代と國なるのせ先方へ替き  
お春お書面して委細き訳を國が一ふとまはらう  
富山のかたる茶へしう種くと笑合をふ合自



お言の通りおあるんぞん 秋の目も 晴れの邊  
夫も多もも 思ふにけを 言ふのじやア多のけさ  
まらたう不金解 能ごとく 安むるものつよ おあが  
実の居るさき 居るんで 形うくひん 次とらト  
声委しく 話語て 夫より 何程でも 多るまじく  
氣を落付てお 茶が居るのとらふにけを 秘すら  
まゝよお 聞せる まゝするを 多る細も 言ふるんで  
解るさる 思ふのまゝのこ 言ひしに 思ふる

くら 堪忍とてお 異ん 思はるヨアノウまの びんと言ひ  
よト 言さして 類赤うの けー 言ひゆんとの 思入れ  
めぞう 俯向と 側みゆ 居る 側女の 初顔との 思  
まうたの ちへアサお 春まらぬ 初からしん した ぬうしん  
まがごまら ましたの けりも 夫とも 思女が 身なる 思  
まらねが 思女み 代りて ませう 一体との お春 思  
けか 思女へ お引留 ものを だ〜 こと 思ひも 思ひ 思ひ  
お 若殿 思生と 助さる ぬが 番場 の 別荘 なる 思





そとへ表の方へと走りゆく跡の両女の顔見合  
此後とて居るうらぶら ちよおま代さん何様か  
たう然らうまエ今か園の通りでいお春さんの舞  
取つて多僥倖の極でいゆるけいども是が表向  
内園加とちらう喜門で住居くろむげこのきんぐ  
能けいどもおびらうきまりの悪のたごまへ左様  
ゆんまうか春さんも一團なるもいさう多のりね  
巻も角も松達がけうやうせまこいんごら

園様くくいん次でけい屋表小居るいさうか松たて  
能らうと相談をなせおまはとと陸まのの極の  
聖も叶の三方四方の活る住居もあつてけい  
何をいふも一團なるもいさう詮方がいね  
とい言人見きりの極でもあつてまのつが何をいふも  
若殿さまのお帰りがあつていお春さんの活るいさう  
ゆくの次いさう一増住居へ帰つて死人の悪業とも  
園さうあて何様もいさう極下あつていません





おちよるうらるとおまはせんヨ へん人の遠へて行くゆ  
等イふくみんとも言ひまはせん けるもか小娘の歌  
江のよみつるまえてあやうらうらうのまをま  
あこのを私ハ見て居りまうか暖がきてま  
うんど此後めんまはまをまをま 言ませんヨ  
あへたわまへんのはまといものご其方ハ見給  
女がゆつて行くものろ 若へんまうま真実とくへを  
あへたサ其澄極ハト耳ふ口 若へつうえんまう今宵

あの一問で 国暖め 居やト言ふ二人ハ  
え別居 契と表へ出て物 流見送つてお園をかみ代  
目と見合せホッパ へお園さん 五 ちよる  
うらぬま 出へんま へんま へんま  
かこめんごねんごま 今の私行く此身達の耳は遠  
へんこののま へんま へんま へんま  
住居へ帰つてお春さんを取へま 工夫をたりのか上  
か別居ヨ へんま へんま へんま へんま

多うかゝも早くも正お園さん ます「か」おさうなる  
ト言ふかゝ言ふ味と持せおまゝ一表のさへと  
作者曰は一回の趣向のしつうの戯場のしつう  
各ものゆゑんの世どもと六好女ものなる目先せ  
替へて流儀とぬぼる極みするまゝ作者の  
用心まゝなりしものむかひなりぬるものなり

春色田家花巻之五了

春色田家の花巻之六

江戸

烏永春水著

第十一回

飛鳥川洲の津とる世多のとも思ひ深てん人の下  
ト詠ふ海くも思ひゆる秋多るべーあひお光と系  
の山の如相素あゝであゝもおおも英藤は名立田乃  
川の波流とてまゝあゝあゝも今日八津を破る









片のけしき哉

くまの瀬のうきえん

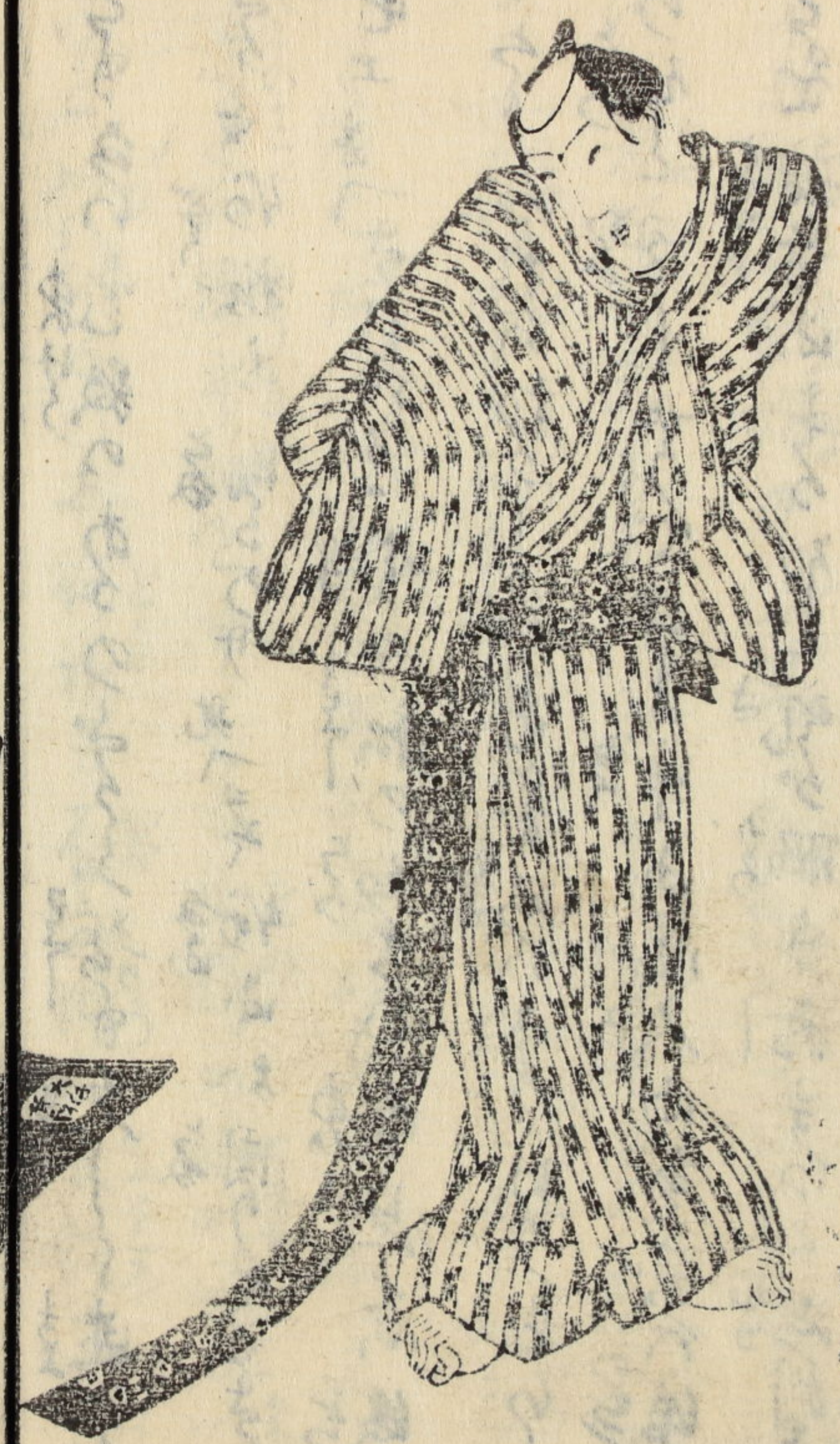
今よひのま

あしを海川を

わさりの

押免つ

文亭主人画



吹くさし一棹をづも柳の南

秋光庵









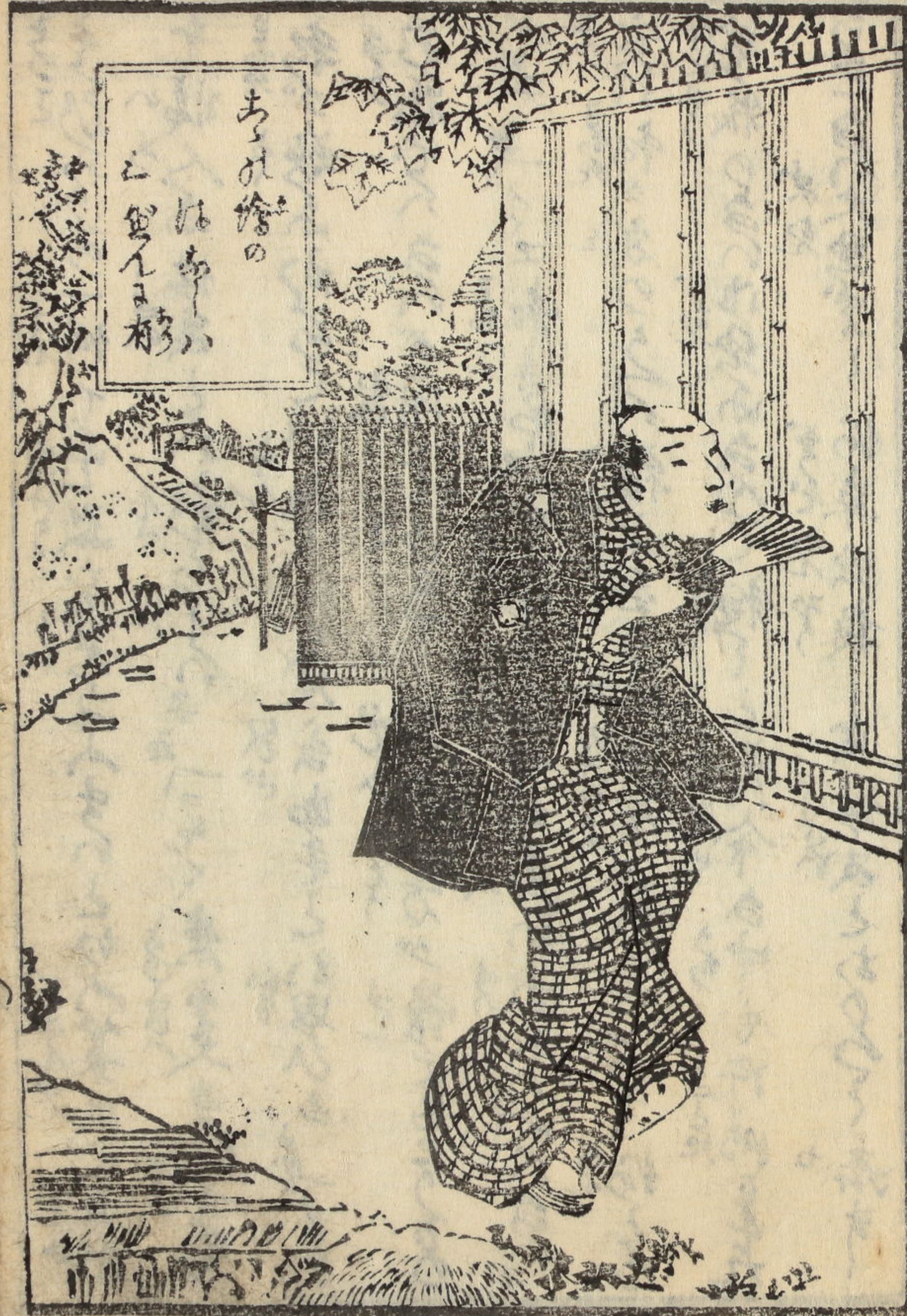






















あるそと 富次郎が因なせー 武家の老人志づらふま  
世に 立出て 武家の 武成傳と云ふは 武「コレヤ 武成を云ふ方の  
あるそと 富次郎が因なせー 武家の老人志づらふま  
あるそと 富次郎が因なせー 武家の老人志づらふま  
あるそと 富次郎が因なせー 武家の老人志づらふま

春色田家の花巻之六

